

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401/044-988-0004

<https://kakio-kyoudo.jp.org/>

第 209 号

シリーズ

杉山神社 3

新たな視点で杉山神社を考える

岡田 誠治（郷土史研究家）

〔1〕杉山神社を考える上での問題点

(4)杉山神社の 3 古社の系統

延喜式内社の杉山神社は、杉山神社群のなかでも有数の歴史由緒や地域での権威を自他ともに認められた存在であることが想像されます。

式内社の杉山神社を論じるうえで、特に古社と認識される杉山神社を掲げてみます。

①鶴見神社 横浜市鶴見区 境内から古代の祭祀具。由緒は不明。祭神：五十猛命、スサノオ尊。

②戸部杉山神社 横浜市西区 創建白鳳三年弥生二十日（同神社由緒書に依る）。

さらに由緒には出雲から祭神を勧請。祭神：大己貴神（オオナムチノ神）。

③茅ヶ崎杉山神社 横浜市都筑区 創建天武白鳳三年（674 年）。創建時祭神：忌部三神。

安房神社忌部氏との関連を記述した系図が存在。現祭神：五十猛命他。

白鳳という年号については色々な説がありますが日本国の歴史には存在しない年号です。一方使用例はあるので、天武白鳳 3 年は 674 年に相当することが理解できます。戸部杉山神社境内の案内板には「白鳳三年（六五二年）」と書かれていましたが、652 年は白雉 3 年です^{（注 6）}。白鳳は白雉の別称、美称という説があり、こちらの解釈を採用されているのかもしれませんが。由緒書からみる限り戸部杉山神社の方が古い創建です。

①の由緒は解りませんが、祭神は出雲系のようです。現在の神社名になる前は「杉山大明神」と呼ばれていました。その祭神スサノオ尊と五十猛命は父と子の関係です。

②は由緒に出雲系を明記しており、祭神も大己貴神という出雲の神様です。由緒書に「・・・当神社の効頭の著しきを以て近隣に杉山社の名称多くなれり（当社の効頭の高さにあやかた故に近隣に杉山社を冠した神社が多くなったのである）・・・」。さらには開拓神たることを明記しています。

③は同神社祝部家の系図により、安房国から当地に進出してきた忌部氏創建の神社であることがわかります。『私説杉山神社考』（以下『私説考』と記す）によれば開拓神の性格がみてとれます^{（注 7）}。

こうしてみると、取り上げた古社 3 社のうち神社由緒で創建年が明記されているのは②と③ですが、この 2 社はそれぞれ祭神が全く異なります。一方は出雲系、もう一方は忌部系です。

特に③は「茅ヶ崎杉山神社祝部家系図」という杉山神社群の中でも唯一創建由緒の文献資料を持ち、有力な原点の杉山神社（本祠）の最有力候補社であり、さらには有力式社候補でもあります。この茅ヶ崎杉山神社の存在が、安房忌部氏は鶴見川河口から武蔵国に上陸し、この社を起点にして鶴見川流域に杉山神社の数を拡大させていったという有力な見解につながります（『私説考』）。ただし当神社の立地は河口に近いというわけではありません。また大きな問題としてこの茅ヶ崎杉山神社の祭神はいつの時期かは分かりませんが出雲系の五十猛命に変わっており、状況が一層複雑になってしまっています。一方②は創建以来、祭神と所在地に変遷の跡がなく、当初からこの地に根をおろした存在のようです。武蔵国には氷川神社群、出雲伊波比神社群、久伊豆神社群などの有力神社が出雲系のスサノオ尊や大ナムチ神を祭神とします。戸部の地にも出雲大社の神（大ナムチ神）を奉じる人々に移りすんだのでしょうか。

しかしながら式社問題から捉えますと、『延喜式』の記載が「都筑郡一座」とあり、戸部の地は久良岐郡と考えられていますので、大きな問題が残ります。同様に④も所在地は橘樹郡と考えられており、都筑郡ではありません。

第一話で書きましたが、神社群の祭神が同一ならばその神社群が有する背景を探る有力な手掛かりとなるのですが、この古社 3 社は 1 社 1 社が別々の祭神であり、その面からは共通の手掛かりを持ってないという重大な具体的事象です。

このように杉山神社を考えるに当たっては「本祠はどこか」「祭神は誰か」「式社はどこか」が大きな論点として取り上げられてきましたが、私はこれ以外にも重要な視点があり、これらの論点だけでは杉山神社群を解明できないと考えております。この点について次号で私の考えを記させていただきます。（続く）

（注 6）境内案内板「戸部杉山神社御社殿改修事業のご案内及びご協賛のお願い（平成三十一年正月）」。

（注 7）（飯田敏郎『私説杉山神社考』平成 21 年 8 月）。

シリーズ
禅寺丸柿の歴史 19

近代における川崎市域及び横浜市北部地域での果樹栽培(19)

相澤 雅雄(都筑・橘樹研究会会員)

禅寺丸柿の口碑について(1)

禅寺丸柿には、ふたつの口碑が知られている。ひとつは、鎌倉時代の建保 2 年(1214)に王禅寺の中興開山であった等海上人が本堂再建のため、用材を求めて寺領である九十九谷に奥深くわけいったところ、柿の老樹を発見した。深紅に実った柿を食べてみると大変に甘かった。同上人は大いに喜び境内に移植し、寺領の農民に栽培を奨励したという説である。この説についてふれている文献資料には、①富樫常治著『実験果樹園藝 中巻』(大正 8 年)、②神奈川県農産課編『神奈川の園芸』(昭和 31 年)、③柿生禅寺丸柿保存会編『郷柿嘗悠久 柿生に生れた 川崎の禅寺丸柿』(平成 17 年)、④ふる里を語る柿岡塾編『柿ふる里』(令和 4 年)などがあげられる。

ふたつ目は、王禅寺境内に立てられている碑「禅寺丸之記」に刻む応安 3 年(1370)に等海上人が勅命により本堂再建のため用材を探していて、寺領の山中で紅熟した柿を発見しお寺の庭に移植した。さらに人々に栽培を奨励したという説である。この説についてふれている文献資料には、①『柿生村岡上村郷土誌』(昭和 44 年 昭和 7 年刊の再版本)、②飯塚重信著『柿生村と私のあゆみ』(昭和 54 年)、③浜田利明著『王禅寺村』(昭和 63 年)、④柿生郷土誌刊行会編『ふるさとを語る－柿生・岡上のあゆみ－』(平成元年)、⑤高橋嘉彦著『わがまち麻生の歴史三十三話』(平成 4 年)などがあげられる。

禅寺丸柿関係の郷土資料の多くは、このふたつの口碑によっていることがほとんどである。ただ、いずれの郷土資料とも、口碑の情報源を明示していない事例が目立っている。等海上人が寺領の山中で発見したという口碑だけは共通している。決め手と成る史料もないことから口碑に頼るしかないのだろう。

次に 1 つ目の建保 2 年説について、この口碑がいつ頃どんな経緯で言われ始めたのか探ってみた。手始めに江戸時代後期の地誌『新編武蔵風土記稿』の都筑郡の「土産」「王禅寺村」の記述を確認してみた。その結果、「土産」「王禅寺村」ともに、等海上人が移植したという口碑は伝えていなかった。



武陽金澤勝景「称名寺晚鐘」
(明治末～大正初期) 筆者蔵

この等海上人については、『続群書類従 第二十八輯下』の中で、中世の東国における真言律宗の拠点であった金沢の真言律宗別格本山称名寺第 4 代の長老實真上人の弟子としてその名前が確認できる。

同書によると、等海上人は律宗の碩徳(せきとく)(学徳ともに優れた僧)で、延命院と号していた。金沢称名寺(寺内の延命院)に初住し、のちに恩田(現・青葉区恩田町)の延命院(現・高野山真言宗摩尼山延壽院徳恩寺)に移られた。南北朝時代の応安 6 年(1373)9 月 3 日に入滅された。『新編武蔵風土記稿』が編纂された江戸時代後期に禅寺丸の口碑があったとしたら、

等海上人と禅寺丸柿との関係について地誌に書かれたとしてもよさそうだと思う。しかし、全くふれていない。禅寺丸柿の呼び方について丁寧に説明しているだけである。

建保 2 年(1214)説の口碑について、実見した限りにおいて最も具体的な記述をしているのは、明治 43 年(1910)刊の『神奈川県農会報 第五十六号』であった。この号で神奈川県農会が「甘柿禅寺丸の新販路－明治四十三年一月調査」と題した報告の中に記述がみられる。その冒頭で建保 2 年の口碑を説明している。ここでは、等海上人が建保 2 年に寺領の山中で禅寺丸柿を見つけたとしているが、「三宝院伝法血脈」に記録する応安 6 年の入滅から数えると、さかのぼること 159 年前になる。余りに年代がかけ離れている。おそらく後世の人がこれまで存在していた口碑に、学徳にすぐれた等海上人のことを付会したものではないかと推測してしまう。等海上人が発見したということは、史実として確認されているわけではない。

(続く)

シリーズ
歴史の中の女性像

その 1 ナイチンゲールの世界 (24)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

生涯を振り返ると……

フローレンス・ナイチンゲール女史は、大富豪の令嬢として大切に育てられましたが、大変心優しい女性で貧しき人々に寄り添うことを厭わない稀有な人でした。そんな性格から、当時は行き場のない貧民の収容施設だった病院で看護師として仕事をする希望を持ち、上流社会の規範から大きく外れた道へ踏み出そうと試みました。この試みは長い試練の末に、病院の総監督という立場を得ることで実現をみます。それから 1 年後にクリミア戦争に従軍したことが広く知られますが、彼女が赴任したのは、クリミア半島からは遠く離れたオスマン帝国(現トルコ)のスクターリに所在した後方の病院でした。この地は激戦地のクリミア半島とは黒海の対岸でした。しかもフローレンスが看護師隊の長として実際に働いた期間は 1 年半程度の短い期間でした。この間のフローレンスの活動が、上流階級の貴婦人から手厚い看護を受けて、大いに感激した下層階級の兵士たちによって本国に伝えられ、「白衣の天使」「ランプの貴婦人」などのナイチンゲール伝説を生んだのです。しかし、フローレンスの本領は、戦地から帰国した後の八面六臂ともいえるような活動にあり、本稿の後半では、その点を主に記述させていただきました。

実際フローレンスはどのような活動をしたのか。論ずる人の立場によってさまざまな主張があるのですが、異論のないところを拾い出すと、次の 8 つの側面が上げられます。第 1 点は、多数の著作が示すように著述家として大をなし、第 22 回に記したように多方面に多大な貢献をしたこと、現在もなお世界各国で読み継がれていることがあげられます。第 2 点は、看護師を社会的に認知された正式の職業として確立した、いわば看護の発見者として位置づけられることがあげられます。第 3 点は、看護教育を中心として人を育てる教育者であること、とりわけ人を育てる立場に立つ、指導者、教育者の心得を自らの行動と共に示し続けたことがあげられます。第 4 点は、病院などで優秀な管理者として、管理の要諦を整理まとめたことがあげられます。この点については、フローレンスが最初に病院の現場に入ったハーレイ街一番地の病院の総監督となった際に、徹底的に病院の悪弊を洗い出し、勤務に問題のある看護師や使用人を解雇して、僅か 1 年で職場規律を確立した手腕が光っています。第 5 点は、政府や官庁に働きかけて時間をかけて実現の方向に導いた衛生改革者としての活動と業績が上げられます。第 6 点は、いつの間にか病院建築についても勉強して理想とする病院建築のあり方を構想し、実際にそれを実現して、病院を快適で過ごしやすい場に変え、貧民の収容所から現在の病院に変化する架け橋を実現した病院建築家の面を上げることが出来ます。第 7 点は、優れた業績を残した統計学者であったことです。計算機もエクセルもない時代に、しかも数表しか存在しなかった統計世界に、初めて視覚に訴える様々なグラフを考案して、統計学会に革命的变化を齎したことがあげられます。そして最後に総体としてのフローレンスの活動は、社会福祉士(ソーシャルワーカー)の側面も持っていたことが指摘できます。

こうしたフローレンスですが、社会的弱者を慈しむ眼差しと共に、管理職など社会的に恵まれた階層に属する人物の仕事ぶりには、容赦なく次々に注文を出し、休むことなく働き続けることを求めた、今ならパワーハラスメントと認定され、厳しい警告を科されるような面を持っていたことも指摘しなければなりません。謙虚な人柄のフローレンスは、自分に特別な才能があると己惚れる事とは無縁な人でした。そのため自分に出来ることは、高い教育を受けたエリートと呼ばれる人たちなら、当然自分と同じようなペースで、仕事をする事が出来ると思い込んでしまったのかもしれませんが、ナイチンゲールナースと呼ばれた看護師管



全 16 巻からなる
『ナイチンゲール全集』

第 16 回史跡見学バスの旅
予告

大磯周辺の旅

～日本初の海水浴場と大政治家たちの隠れ家～

時期は 11 月下旬の水曜か木曜に開催。見学地、参加費等詳細は、次号でご案内します。また史料館 HP にもアップします。

管理職の人達も、看護師学校の生徒たちのようにやさしく迎えられることはなく、病院での出来事を報告する都度、厳しい指摘をうけていたと伝えられています。(完)
(次号は赤十字について記します。)

『文久二・三年王禅寺村御用留記帳』を読む — 4 —

飛田 三枝子(柿生郷土史料館専門委員)

文久 2 年(1862) 2 月に増上寺から借りた鉄炮を返す記事は 48 頁左半分から 50 頁 3 行目までに書いてある。読んでみると「恐れながら書付をもって・・・」と始まり「・・・石川村年寄一ほか、左の通り名前もの共一同申し上げたてまつりそうろう、当二月中、御拝借つかまつり候御鉄炮御返納方延引にあいなり候段、今般御察当(お咎め) こうむり恐れ入り奉り候」今後は毎年 11 月 20 日までに遅滞無く返納するので、組合村の連印をもって、「このたびの儀は・・・御憐憫の御沙汰ひとえに願ひ上げ奉り候」と歎願している。

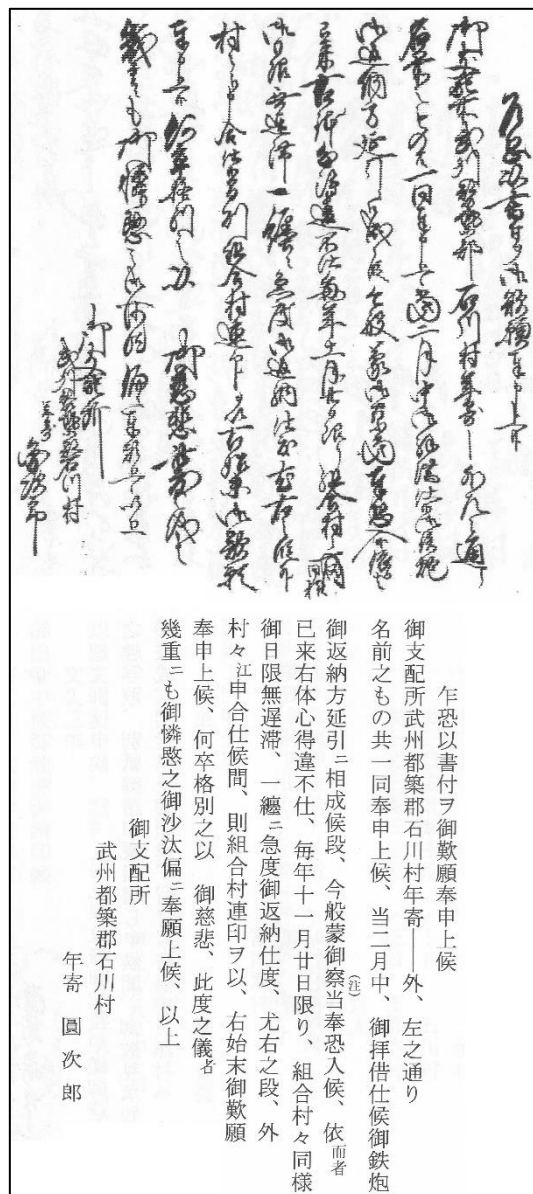
鉄炮返納期限までに石川村は鉄炮を返さなかったのである。この歎願書の日付は 12 月 1 日で、宛先は増上寺御霊屋料地方役所だから、この書類と一緒に鉄炮を地方役所に返したのだろう。御用留には石川村が作成した歎願書が写されているので印は無いが、連印といっているように王禅寺村と川和村連名でお願いしている。荏田村が入っていないのは御霊屋料では無いからと思われる。(返納期限は時代によって異なり 12 月の時もある)

49 頁の文書では組合惣代が川和村になっている。また 48 頁の初めに「御鉄炮廻文一通」という川和村からの廻文が載っていて、亥年の鉄炮も 2 月 6 日に貸し渡されると書いてあるので、文久 3 年の当番は川和村であり、3 年も例年通りに借りられたことが分かる。

それでは鉄炮による猪鹿類の捕獲のようすはどうだったのだろうか。志村家文書の元文 5 年(1740)の鉄炮預り手形には「猪鹿狼うさぎの類打ち取り申し候、そのほか諸鳥一切打ち申すまじく候」とあるから、鳥は撃たなかったようだ。

『増上寺史料集』所収の享保 19 年(1734) 12 月、増上寺輪番役人から寺社奉行あての文書では「猪三疋鹿四疋石川村 猪二疋鹿一疋川和村 猪六疋鹿五疋王禅寺村 猪十五疋鹿五疋荏田村 べ四十一疋」とある。各村が鉄炮を増上寺から借りる一方、増上寺は鉄炮関係の内容を寺社奉行と大目付に報告しており、幕府による鉄炮の取締りが厳重だったことが窺える。また志村家文書では文化 8 年(1811)の増上寺宛の「一札」に「猪四疋、鹿五疋打留め」、「永代日記」には文久 2 年は「猪一疋 鹿二疋」とある。狼については、拝借鉄炮による捕獲ではないが、享保 3 年、一帯の村々には鷹狩りの準備のため猪鹿等の追込みが行われていて、王禅寺村の「御用留書面之写」には 4 月 16 日に狼がかかったという廻状が麻生村に泊まっていた伊奈半左衛門(郡代)の家来から届き、早野村へ継いだと記されている。

(『文久二年・三年王禅寺村御用留記帳』は当史料館で販売中。千円)



『御用留記帳』 部分

柿生郷土史料館 第 101 回
カルチャーセミナー

柿生中学校考古学研究部による横穴古墳群の発見と調査

講師：川瀬健一氏(考古学研究部顧問)
藤本 隆 氏(柿中 32 期卒業生)
三浦伸昭氏(柿中 35 期卒業生)

日時：10 月 25 日(土)13:30~15:30

会場：柿生郷土史料館特別展示室

参加費 無料(どなたでも参加できます)

現在、展示・紹介中の柿生中学校考古学研究部の横穴古墳の研究について、実際に部員たちと行動を共にしながら、部員の自主性を尊重して、後方から部員たちの活動を支えた顧問の川瀬元教諭と、古墳の発見者の藤本隆氏、横穴古墳の実測図作成を担った三浦伸昭氏の三名の方をお招きして、当時の苦心談を種々語っていただこうと計画したセミナーです。

昭和 50 年代の柿生地区について、皆様を交えて語り合うセミナーにしたいと考えています。ご来場をお待ちしております。

柿生郷土史料館 開館日のご案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日 : 10 月 4・11・18・25 日(土曜日) 11 月 2・16・23 日(日曜日)

◎開館時間：午前 10 時～午後 3 時